

世界総人口1／4へのパスポート

月刊イスラム市場

《ダイジェスト版》

次なる市場への進出を検討中の企業様、必見！

『月刊イスラム市場』発刊のお知らせ

～「宗教を切り口に」次なる市場を開拓～

■ 昨今の日中関係の悪化や、著しい新興国の経済成長の勢いを背景に、本格的にチャイナ＋1の時代が到来しています。皆様の視線の先には、生産拠点、販売市場としての、インドネシア、タイ、ベトナム、マレーシアといったASEAN諸国があるのではないのでしょうか？ そんな中、東南アジアにありながら、世界最大のイスラム教人口を抱えるインドネシアや、イスラム教を国教とするマレーシア、ブルネイなどの国々の存在を背景に、「イスラム教」という「宗教を切り口に」東南アジア市場を開拓して行こうという流れが、ようやく日本でも大きな流れとなり始めています。

しかし日本において「イスラム教」に関する情報は非常に限られており、情報不足の状況が続いていると感じています。そこで弊社では、この現状に対処すべく、昨年10月よりイスラム経済の現状やビジネスチャンス、イスラム教徒の習慣や文化、ものの見方や考え方、それに関連する法律や会計制度など、イスラム市場に関する情報を包括的に提供する為の月刊マガジン「月刊イスラム市場」を発刊させて頂いております。

こちらのダイジェスト版には、過去に掲載された記事の一部をまとめさせて頂いております。世界人口1／4、17億人の巨大なイスラム市場に、皆様の事業、商品、サービスがリーチできる羅針盤となれるよう、リサーチャー、編集員一同日々邁進して参ります。是非この機会に「月刊イスラム市場」のご購読をご検討頂ければ幸いです。



サウジアラビア王国



概要

サウジアラビアは「サウジアラビア王国」という正式名称を持ち、西アジアで最も大きい国家である。アラビア半島の中北部を占め、アラブ国家としてはアルジェリアに次ぎ、2番目に大きい。北部の国境はヨルダンとイラクと、東部の国境はバーレーン、アラブ首長国連邦と、そして南部の国境はオマーン、イエメンと接している。

1902年に僅か22歳のアブドゥルアズィーズ・イブン・サウード国王（サウジアラビア王国の初代国王）がサウード王家先祖伝来の本拠地リヤドをライバルのラシード家から奪回し、アラビア半島のほぼ全域を版図に収めた。現在のサウジアラビア王国は、1932年に主要地域の統一によって、イブン・サウードによって建国されたものである。

サウジアラビアは、サウード家による絶対君主制でワッハーブ主義に基づく厳格なイスラム教義を国の根幹としている政教一致の体制を持っている。コーランとスンナ（ムハンマドの言行にもと

づく行為規範）を重視し、92年に制定された統治基本法にも「王国の統治理念はコーランと預言者の言行（スンナ）に見いだされ、コーランとスンナが全ての王国の規則を支配する」（7条）という記載がある。

2010年のエコノミスト誌の民主度調査によると、サウジアラビアは調査対象国167カ国中7番目に権威主義的であるという。

2011年9月25日に行われた諮問評議会の第5期（1期4年）3年目の開会式において、アブドゥッラー国王は二つの重要な決断を下した。第一は、これまで男性のみで占められていた諮問評議会に、2013年から始まる第6期には女性も正式な議員として参加すること、そして第二は2015年の地方選挙では女性も立候補し、投票できるようにすることである。

基本的に国王は初代国王であるアブドゥルアズィーズ・イブン・サウードの息子から選ばなければならない。そして、その選ばれた子孫が王になるにはウ

ラマー（イスラムにおける知識人）の許可が必要である。2007年にアブドゥラー国王の勅令によって、皇太子の任命や国王及び皇太子が健康上の理由で職務不能となった際の職務を代行する「忠誠委員会」が結成され、メンバーはアブドゥルアズィーズ直系の子孫で構成されている。

サウジアラビアでは、政党や政治集団が禁止されておりサウジアラビアの諸都市においては、左翼的思想を有する者の間で緩やかなネットワークが形成されてきたが、いずれも地下組織的な活動を強いられてきた。ソヴィエト崩壊直後には多数の逮捕者が出るなど政府の弾圧を受けたこともある。

国内で最も力のある派閥は、「スダイリ7（Sudairi Seven）」として知られるスダイリ家のハッサ妃の7人の息子であり、ファード王の兄弟及び子孫で構成されている。

女性の社会進出も徐々に進んでいる。2005年にアブドゥッラー国王が即位してからは改革が加速化し、女性の地位も大きく向上した。その中でも、サウード・アル・ファイサル氏は政治的かつ社会的な革命の最も強力な支援者として知られており、女性が投票権獲得、女性のキャリア支援、運転の許可など様々な活動に携わって来た。

経済

石油産業は国内の最重要セクターであり、国家歳入の45%、GDPの55%、輸出歳入の90%を占める。GDPの約40%は私有企業によるものである。約550万人の外国人労働者を持ち、石油、サービス業において重要な役割を果たしている。政府は石油への依存を削減し、国民により多くの労働機会を提供するためにプライベートセクターの成長を促している。政府は国内に投資する外国企業を奨励しており、特にエネルギーや電気通信関連の事業を優遇している。こ

の努力の結果と多様性溢れる経済が外国人投資家を惹付け、サウジアラビアは長年に渡る交渉を経て、2005年WTOへの加盟を果たした。石油産業がもたらす歳入は政府予算の大きな黒字に貢献しており、リヤド（サウジアラビアの首都）では、労働訓練や教育、インフラ整備と政府関係者の昇給に大規模な

予算をつぎ込んでいる。

サウジアラビアは2014年度予算に2280億ドルを掲げており、これは2013年度に比べて約4.3%増加している。サウジアラビアの国内総生産は今年3.8%の成長が見込まれており、2013年度も5.8%の成長を記録した。



文化

サウジアラビアには多くのイスラム的遺跡があり、古代から貿易の中心として栄えながら遊牧民の伝統を今もなお持ち続ける彩り豊かな文化が特徴である。サウジアラビアの社会はここ数十年で大

メッカへの巡礼（ハッジ）の様子。全てのムスリムが、一生に一度のハッジを義務づけられている



きな変化を遂げた。人々は自分たち独自の価値観と慣習、伝統衣装などを現代の生活に適応させてきたのである。古代から重要な貿易の拠点として位置づけられ、アラブの人々は多くの文化の影響を受けてきた。紀元前3000年頃、アラブの商人は貿易のネットワークを南アジアやエジプトまで伸ばし、ビザンツ帝国や地中海の陸地とも交流を持つようになった。

7世紀のイスラム文化の導入によって地域の文化が定義付けられるようになり、アラビア半島が成長すると同時にイスラム文化は西は大西洋、東はインドや中国まで広がったのである。その結果、文化、科学、哲学、芸術など多くの分野が成長を遂げ、この時代はイスラムの『黄金時代』と呼ばれているのである。過去14世紀において、世界各国からのメッカへのムスリムの巡礼者を受け入れ、文化を更に豊かにしてきた。ムスリムの巡礼者はアフリカから象牙を、東諸国から絨毯を持ち込み、その一方でサウジアラビアの文化を自国に持ち帰った。サウジアラビアの伝統はイスラムの教えとアラブの習慣に基づいたものであり、子供たちは家族や学校でこの文化を学習する。

ラマダーンやハッジ（巡礼）のシーズ



ジッダの最も有名な観光スポットはアルバラッド、オールドタウンである。この街の壁は古くに作られたものが多く、独特の雰囲気を持つ。

ンやそれに伴う祝日は大きな盛り上がりを見せる。断食を行うラマダーン明けのお祭りでは、子供たちにプレゼントや衣装を買う習慣があり、友人や親戚を家族で訪れる。

何百万人ものムスリムが世界から訪れるハッジのシーズンはイードアルアドハの祝日と共に終わり、羊や山羊などを犠牲に捧げる儀式が行われる。アラブの伝統はサウジアラビアの生活に

においても重要な役割を果たしている。これらの昔からの伝統は何年もの時を重ねて進化し、大変尊重されている。これらにはサウジの人たちが持つ気前のよさやおもてなしの心も含まれる。最もシンプルなおもてなしの表現方法はコーヒーである。ゲストにコーヒーを出すことはサウジアラビアにおけるは文化的な伝統で、デザートと果物と共に小さなカップに入れられて提供される。もう一つのおもてなしの手法として、ゲストが訪れる際

にお香を焚くことが挙げられる。

小学校、中学校、高校全ての段階において教育を無料で受けることができるのもサウジアラビアにおける特徴的な事象である。学校のカリキュラムの大部分はイスラム教に関するものであり、高校生になると、学生は宗教的な道、または技術的な道のどちらに進むのかを選ぶことが出来る。女性も学校に行くことは許されているが、その数は男性と比較すると圧倒的に少ない。この数字は国全体の識字率にも反映されており、男性が85%を超えるのに対し、女性は70%ほどしかない。クラスは性別によって明確に分かれており、2000年以降大学の数が飛躍的に伸びた事で教育のレベルが急速に成長している。国を代表する教育機関として、1957年にサウジアラビア初の大学として設立されたキング・サウド大学、1961年にメデيناに建てられたイスラミック大学、そして1967年にジッダに設立されたアブドゥルアズィーズ大学が挙げられる。その他の大学は主に科学と技術に特化したものや、軍事学校、コミュニティカレッジ、薬師学校等である。

都市

リヤド

16世紀までリヤドはハイルという名前で知られ、3世紀以降アラビアにおける重要な都市として機能していた。中世にはアル・ヤマーマの首都としてアラビアの中心部・東部の太宰的存在となった。10世紀以降アラビアにおける国民の資産の減少と共に、アル・ヤマーマの名は徐々に薄れてしまった。そしてハイルは西へと繋がる唯一の都市、「ナジド」の一部となった。ハイルという名前は庭を意味する「アル・リヤド」という名に取って代わられ、かつての大きな都市はいくつかの街に分割され、農耕地域となった。リヤドは王国の三大都市の中でも最も厳格な都市であると考えられている。ほとんどのエンターテイメントは禁止されており、気候や少ない観光地を考えると、ビジネス以外の目的で訪れることはないかも知れない。しかし、王国内のワッハーブ派の保守性と西洋の影響を受けた現代技術の融合を見るには絶好の場所である。基本的に男性はトープ、女性はアバヤをドレスコードとして着用するが、西洋の影響を受けた若いサウジアラビア人を見ることが出来るかも知れない。



シャワルマはアラブの肉を使った中東風サンドイッチの様なもので、薄く延ばして焼いたナンのようなパンに、グリルしたチキンや羊の肉をスライスし、野菜やマヨネーズのような特製ソースと共に巻いて食べる。